

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02740

研究課題名(和文) 発想法による挨拶表現の歴史の変遷と地理的分布の総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on the Historical Change and Geographical Distribution of Greeting Expressions Based on Ideation

研究代表者

田島 優 (TAJIMA, Masaru)

明治大学・法学部・専任教授

研究者番号：80207034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：挨拶表現、特に感謝表現の発想法について、歴史的・地理的な観点から研究を進め、両者を関連させながら考察してきた。

発想法の歴史においては、中世末までは困惑の発想であり、その代表的な表現がカタジケナイである。近世からは、発想法が評価になってきた。その代表形がアリガタイである。発想法において大きな転換を起こしたのは、感謝の言語行動が双方向の言語行動になったことによる。それまでは上から下へは喜びや労いの表現が用いられていた。近世後期頃から相手への気遣いである配慮の発想法に変わってきた。その代表的な表現がキノドクやスママセンである。地理的にも発想法の歴史が分布として現れていることが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

感謝表現の歴史的な変化を辿ることにより、日本人の感謝に対する発想の変化を見ることができる。カタジケナイによる困惑の時代、アリガタイによる評価の時代、スママセンによる相手への配慮の時代へと変化してきた。この変化は、それぞれの時代の社会構造や状況と大きく関わっているのである。困惑の時代は、身分差が大きく、感謝の行為は下からであった。評価の時代は、感謝の行為が双方向になり、下から上の行為を評価する必要が生じた。配慮の時代は、社会的に余裕ができ、相手を思い遣るようになった。現代は配慮の時代である。方言に見られる様々な表現も、これのいずれかに属しており、決して特殊なものではないのである。

研究成果の概要(英文)： I have considered greeting expressions, especially expressions of gratitude, from both historical and geographical perspective, and have discussed the relationship between two.

In the history of linguistic ideation, the idea of feeling embarrassed prevailed until the end of Middle Ages, and a typical expression was katajikenai. Since the early modern period, the conception of expressions became increasingly based on the idea of evaluation. The representative form of this is arigatai. This major shift in ideation occurred because the verbal behavior of gratitude became bidirectional by including the top-to-bottom(superior-to-inferior) direction in addition to the preexisting bottom-to-top direction. Notably, from the later part of the early modern period, the shifted toward that of consideration, that is, concern for the other person. Typical expressions of this period were kinodoku and sumimasen. The history of ideation also appears in the form of geographical distribution.

研究分野：日本語学

キーワード：感謝表現 発想法 歴史の変遷 地理的分布 困惑 評価 配慮

## 1. 研究開始当初の背景

感謝表現には様々な表現があるが、それらの表現には連関がないと考えていた。しかし、感謝表現の多くがマイナスの意味の語をもとにしていることに気がついた。なぜ感謝表現にマイナス表現が使用されるのか。これは、中国語においても謝辞と言ひ、また感謝という語自体に「あやまる」という意味があることと関係していると思われた。この「あやまる」の観点から、感謝表現を見てみると、カタジケナシやスミマセンとのつながりが見えてきた。そのことから、感謝表現の変遷の中にも人々の意識のある種のつながりがあるのではないかと思えてきた。

方言においても、タエガタイやタマルカというような困惑による表現、またキノドクナやタイヘンダという気遣いによる表現が使用されている。これらの表現においても、ある程度グループ化が可能なように感じられた。そのグループにおいても、歴史的な変遷と対応しているように思われた。

そこで、感謝表現について徹底的に調査を行い、文献における変遷、方言分布における変遷、そして文献と方言分布との関係について追究したいと考えた。

## 2. 研究の目的

挨拶表現、特に感謝表現は時代時代によって新たな表現が使用されている。しかし、感謝表現のための創出されたものはなく、既存の語や表現を利用している。本研究は、既存の語を感謝表現として利用する人々の意識を、発想法という観点から見つめ直して、そのような発想法が用いられる時代的背景を明らかにすることにある。また、その発想法にも変化が生じているが、その根底には共通するものがあり、それぞれの発想法の連関や転換などを、使用されていた表現をもとに明らかにする。

方言の分布状況についても、発想法の共通性の有無によって、地域の分割や、発想法の伝播状況を明らかにしていく。

歴史的な面と地理的な面とを合わせて、発想法の歴史的な変化と地理的分布との関係から、地域による発想法の違いやその原因を明らかにしていく。そして、日本語史研究における発想法の導入の重要性と、発想法をもとにした研究方法のモデル化を構築することを目的にしている。

## 3. 研究の方法

文献については、特に感謝表現について、上代から現代までの様々な文献から抜き出し作業を行う。今回は近世後期から始めて、遡っていく方法をとった。抜き出したものを歴史的に並べ、新しい表現の出現時期、並びにその社会状況を考慮に入れて、その表現が出現してきた原因理由を考察する。特に近世においては、上方と江戸の二つの文化圏があるため、それぞれの感謝表現の変遷を辿る。これは方言の感謝表現の分布を解釈する上においても重要である。

各地の方言については、『方言文法全国地図』の資料を土台として、その分布の補充として、日本放送協会編『全国方言資料』や文化庁による「各地方言収集緊急調査」といった談話資料、そして各地から発行されている方言辞典や方言集を参考にして、各地の感謝表現の分布を明確にする。その各地の実態をもとに、それぞれの地域での感謝表現の発想法を明らかにする。その際に発想法がわかりづらい場合は現地において意識調査を行う。そして、方言分布から方言における感謝表現の発想法の変遷を辿っていく。

最終的には、文献における発想法の歴史と方言分布における発想の歴史とを対照させることによって、その発想法に基づく表現のヴァリエーションや発想法の連関を探っていく。

## 4. 研究成果

まず大きな成果だと考えているのは次のことである。感謝表現には様々なものがあり、様々な変遷を経てはいるが、その根底にあって共通しているのは困惑に基づく発想によっていること。そして、その困惑の発想法が、上代から現代までずっと、日本人の感謝の根底に存在しているのである。この困惑のもとで、恐縮から評価、そして気遣いというように発想法が変化してきたのである。恐縮の代表的な語形がカタジケナシ、評価の代表的なものがアリガタイ(アリガト)、そして気遣いはスミマセンである。それぞれの発想のもとで、また多くの表現が生み出されて来ている。これは、方言についてもいえることである。感謝表現を含めた多くの挨拶表現が、そのためだけに生成されたのではなく、既存の語を基にしている。これは、挨拶表現が語用論的なものであることを示している。

次に発表した論文で個別に明らかにしたことを述べる。まず文献における感謝表現や挨拶表現について発表順に従って説明していく。

本研究の根幹である発想法の転換について、文献と方言分布をもとにして、困惑(自己)から同情・配慮(他者)への転換があったことを示した。感謝表現が、自分に関わる表現から他者を意識した表現に変化している。

別れの挨拶は、サラバからサヨウナラに変化しているが、ともに下略形であり、挨拶表現の成立の特徴に合致している。サラバは「サラバ 暇申さむ」の、そしてサヨウナラは「サヨウナラ

御機嫌よう」の下略形である。サラバからサヨウナラに変化したのは、接続詞のサラバの使用が減少してきたことによる。その時その時に使用されていた語に基づいて挨拶表現が生成されていることがわかった。

多くの挨拶表現は19世紀前半に発達してきている。それを観察するには人情本が適している。またそれらの表現は、洒落本にも観察されるが、遊廓を舞台にしている関係で、人情本に比べて表現の種類が少ない。

関西を中心とした感謝表現としてオーキニがある。オーキニは辞書などでは明治以降の表現とされていた。しかし、近世後期において上方で既に使用されていたことを上方の洒落本によって明らかにした。また、このオーキニの発生は江戸であり、それが京に伝わったと考えられる。オーキニは最初は上から下への感謝表現とともに使用されていたが、後に下から上への感謝表現とともに使用されるようになる。江戸で使用されなくなったのは、オーキニサという相づち表現と同音衝突を起こしたことによる。東京の近辺に見られるオーキニはその残存である。一方、上方で勢力を得たのはオーキニが使用される前に同じ副詞によるダンダンという感謝表現が用いられていたからである。

近世前期には「冥加」に関わる表現が多く使用されており、「冥加」が人々の生活に関わりのある語であった。それらはプラスのものもあればマイナスのものもあった。プラスのものは感謝表現として使用されていた。しかし、現代まで残っているのは「冥利に尽きる」だけである。この表現は現代ではプラス的な意味で使用されているが、近世においては「冥利(冥加)」が「尽きる」すなわち神仏の恵みが終わるという意味であった。現代のような変化を起こした原因は、「尽きる」の意味の派生による。

近世前期に、感謝の行為が今までの下から上への行為に加え、上から下へも行われるようになった。これまでも上から下へは感謝らしきものが行われていたが、それらは労りの表現や喜びの表現であり、相手の行為を称えるものであった。それが社会構造の変化によって、上から下へも同じ表現が使用されるようになった。そのために、下から上へは新しい表現が必要となってきた。それがアリガタイである。アリガタイはもともとは神仏に関わる表現であり、仏教に関わる男色の世界から一般的世界へと広がっていった。

感謝表現のカタジケナイを考えるには、その表現が使用され始めた時代における用法を確認することが重要である。そこで宣命のカタジケナシの使用について観察した。宣命は天皇のことばであり、国のトップと考えられる人物が下の立場にあるカタジケナシを使用している点において、興味深い。宣命におけるカタジケナシの用法には二つの用法があり、一つは恥ずかしさを表すものである。これはカタジケナシの基本的な意味であり、日本語の感謝表現の根底にあるものである。天皇は、自分のいたらなさや天地の神々に対して恥ずかしいと思っている場合と、人々が自分(天皇)の政治態度を恥ずかしいと思っている場合とに使用されている。もう一つは、感謝の用法であり、代々奉仕してくれる藤原氏などに対して用いており、天皇家における藤原氏の権力の強さが感じられる。

このように、近世後期から近世前期に遡り、一気にカタジケナシが使用され始めた上代に飛んでしまった。文献については中世については既に行っているため、中古の分析が今後の課題である。

方言に関しては、新型コロナウイルスの関係で、ほとんど調査が行えなかった。感謝表現の発想において興味深い新潟県佐渡市、山形県鶴岡市についてはコロナウイルスが広まる前の実施であった。青森県弘前市は一時的に感染が収まった時期に実施した。

佐渡においては、お誉め、恐縮、困惑の発想に基づく表現が使用されている。全島にわたって使用されているのは、お誉めによるデカシマシタと恐縮によるカネマシタである。困惑に基づく表現は、北西部で使用されているドーナルヤカと、南部でのナンノコッタロがある。南部の中の特に南部にアンという表現が用いられている。これは日本全体でも特に辺鄙な地域に見られるものであり、興味深い。

山形県鶴岡市では、中心部寄りの黒川では庄内でよく使用されているモッケナとナントモヨーが使用されている。モッケナは配慮に基づく表現と思われる。一方、ナントモヨーについてはよくわからないが、副詞的な表現と考えられる。もう一箇所調査を行った大鳥は越後との繋がりの強い地域であり、黒川とは表現が異なっていた。評価を表すカブンと、喜びのウレシイとが使用されていた。

青森県弘前市ではメヤグが感謝と謝罪の用法で使用されている。この感謝と謝罪の用法は、一般的なものと同じであり、相手から行為によるもの(感謝)か、自分の行為によるもの(謝罪)かの違いである。両用法ともに、相手を意識しない話し手自身の率直な感情の表明であり、発想法の歴史からいえば、困惑に基づくものである。古い発想法による表現の残存と考えられる。

方言による表現を見ると、困惑に基づくタマルカ・タエガタイ、評価に基づくカブン・ゴチソー、そして気遣いのキノドクナ・タイヘンダ・ワルイナ・スマナイといったものが見られる。また、上位からの表現であった、タイギナやウレシイなども併用されている。現代の感謝表現の発想法が気遣いであるため、各地でそれぞれの方言形に対して気遣いによるものというような再解釈が行われている。そのような再解釈が可能なのは、それぞれの発想法の根底に困惑があることによる。

文献、方言の研究とともに取り敢えず気になった点から進めてきたため、アトランダムな状況で

ある。これまでの研究の全貌を見極めるためには、今後トータルに見渡す必要がある。

文献については、上代から現代まで、時代の流れに沿って眺めていくことによって、発想法の変遷やそれぞれの発想法におけるヴァリエーションや、発想法の変遷における連関がより明確になってくるであろう。方言においても、文献で明らかになったことを利用して、それぞれの発想法による表現のヴァリエーションを明らかにして、それぞれの分布状況を確認していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田島優	4. 巻 555
2. 論文標題 宣命におけるカタジケナシ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 39-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 561
2. 論文標題 津軽方言の感謝表現メヤグ（迷惑）をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治大学論集論集	6. 最初と最後の頁 51-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 547
2. 論文標題 山形県鶴岡市の感謝表現	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 143 - 157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 553
2. 論文標題 感謝表現「おおきに」の誕生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 25 - 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 21
2. 論文標題 感謝の双方向化と感謝表現の双方向性 - 近松世話物を資料として -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 91-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 545
2. 論文標題 浮世草子における「冥加」に関わる語彙について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 135-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 546
2. 論文標題 佐渡の感謝表現	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 97-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 537
2. 論文標題 オーキニ考 (補説)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 1 - 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 2018年
2. 論文標題 さようなら・ごきげんよう	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 銘傳大學2018國際學術研討會 日文組	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 17
2. 論文標題 さようなら考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東海学園 言語・文学・文化	6. 最初と最後の頁 9 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島優	4. 巻 20集
2. 論文標題 人情本を利用した挨拶表現研究 (序説)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 341-363
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田島 優	4. 巻 19
2. 論文標題 困惑 (自己) から同情・配慮 (他者) へ 感謝表現の発想法の変化	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 369-389
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田島優
2. 発表標題 さようなら・ごきげんよう
3. 学会等名 銘傳大學2018國際學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------